

アルバイト経験はキャリア意識の形成に どのような影響を与えるのか¹

杉山 成

青年期のキャリア意識の発達についてはさまざまな関連要因が検討されているが、これらは次のような3種のカテゴリーに分類することができる。①両親の職業や収入、居住地域等の社会経済的要因、②将来展望や社会志向性、自己効力等の個人特性に関する要因、そして、③高校・大学のキャリア教育やインターンシップの経験といった職業的社会化の要因である。このなかで職業的社会化の研究は対象が多岐にわたることもあって実証研究が遅れており、青年期において職業世界に関与することとキャリア意識の発達との関連性は十分に解明されていない。そこで本研究では、この立場からアルバイトという職業経験をとりあげ、キャリア意識に与える影響について検討する。

現代の青年にとってアルバイトは非常に身近な職業経験である。独立行政法人日本学生支援機構による平成16年度学生生活調査によれば、昼間部の大学生のうち約76.8%が何らかのアルバイトを経験しており、全収入のうち約15.7%をアルバイトによって得ている。アルバイトをしている学生のうち、約60%は長期休暇中も授業期間中も従事しており、就いている職種の割合は、軽労働(64.0%)、家庭教師(16.5%)、特殊技能・その他(9.5%)、事務(6.8%)、重労働・危険作業(3.2%)というものであった。

これまで青年心理学の立場では、こうしたアルバイト体験を自己形成の過程と結び付けてとらえることが多かった。たとえば、若松(2006)は、青年期のアルバイト経験の効用として、それまで保護される存在でしかなかった

¹ 本研究は、平成18年度科学研究費補助金(課題番号17730361)による研究成果の一部である。

青年がそれまでとは違った視点で社会の構造を理解したり、自身で稼ぐことによって金銭の価値を再認識したりする契機となるとしている。このような立場からは、アルバイト経験が社会との関わりを通して、キャリア意識の発達を促進することが推測される。

それに対し、近年になって、いわゆる「フリーター」に関する社会問題の議論において、アルバイト経験がフリーターへの選択を促進するという指摘がされるようになった。小杉(2001)は、首都圏の高校3年生を対象にした調査を行っているが、それによれば、高校時代からフリーターを予定しているものは、たいてい在学中にアルバイトを経験していた。また、彼らの多くが「アルバイトで生活する自信がついた」と回答しており、それまでの生活の延長としてフリーターを選択する傾向があるという。他方、福武書店教育研究所が首都圏の高校2年生を対象に行った調査によれば、アルバイトをする理由の多くは「欲しい物を買うため」であって、将来の仕事との関連を示す回答はほとんどみられなかった。同様の傾向は吉田・飯田・三宅(1997)の調査結果にもみられ、アルバイトの理由として「仕事を知るため」や「将来の仕事に生かすため」などの回答は極端に少ないものであった。このように高校生のキャリア発達とアルバイト経験の関連の結果は明確ではない。

大学生を対象にアルバイト経験とキャリア意識の関連に焦点を当てた研究はほとんど見られない。しかし、大学卒業者のフリーターが増加しつつある現状や、キャリア発達における成人形成期として18歳から25歳程度までの期間が重視されていることを考慮すると、大学生のキャリア意識とアルバイト経験の関連を検討することは、フリーター対策の上でも大学のキャリア教育を考える上でも急務といえよう。

そうしたなかで筆者らは近年、アルバイト経験のある者とない者のフリーター生活への態度を調査した(杉山・神田, 2003)。その結果、アルバイト経験群の方が、未経験群に比してフリーター生活に対し肯定的な態度を示すという傾向を確認した。ただし、これは横断的調査であるので、直ちに両者間に因果関係があることを示すものとはいえない。この場合、両変数の間には

2つの可能性を想定することができるであろう。一つはアルバイトの経験がフリーター生活への態度を肯定的に変化させるという因果的関係の可能性である。そしてもう一つは、もともと本人の中にあったアルバイトへの肯定的態度が、アルバイトをするという選択とフリーター生活への態度に影響を与えるという間接的関係の可能性である。

そこで、本研究ではこれらの点を明らかにするために、縦断的手法をとり入れた調査によって、アルバイト経験とフリーター生活への態度との関連を検討することとする。手法としては、アルバイト経験の把握のために、4月と7月の2回、就業動機やキャリア意識の調査を行う。4月の時点では、アルバイトを経験していない新入学生が多いため、彼らが7月までの間に新たにアルバイトを開始した場合、その意識の変化を測定することが可能となる。アルバイト経験からキャリア意識への因果的影響があるのであれば、アルバイトを新規に開始した学生としなかった学生との間には、4月時点ではキャリア意識に変化がなく7月時点で差異が生じているであろうし、因果的影響がないのであれば、4月時点でキャリア意識に差異がみられることが予想される。

方法

調査対象者 国立大学の大学生。4月調査では329名、7月調査では328名が参加した。

質問紙の構成 質問紙は、調査対象者の基本的属性(所属学科、年齢、性別)、アルバイト経験に関する質問のほか、以下に示す各尺度の項目で構成された。

(1) 就業動機尺度：安達(1998)による41項目の尺度に対し、5件法による回答を求めた。これは「未入職者が未来の仕事状況に関連して持っている動機、または将来携わる職業的場面を想定した動機」として定義された就業動機を測定するものであり、安達(1998)による因子分析では「探索志向(職業への関心や職業探索に前向きな傾向)」「対人志向(職場の人間関係や対人

交流に関心が高い傾向)」「上位志向(仕事を通して高い地位を獲得することに高い関心を示す傾向)」「挑戦志向(達成困難な仕事をやり遂げることに喜びを感じる傾向)」の4因子が抽出されている。

(2) フリーター生活への態度：杉山・神田(2003)は、フリーター生活への態度に関わる要因として、性別、目標の有無、生活の形態という3要因を選出し、それらを組み合わせた8種のビネットによってフリーター生活への態度を測定しており、今回もそれを使用した。ただし、8種のビネットのうち、本研究では、より中心的な意味を持つビネットだけを用いた。具体的には次の2種である。その内容に対し、①その生活をどの程度認めるか(共感度)、②登場人物が幸福になれると思うか(成功期待度)、③ビネットで示された生活に賛成か(賛成度)の3点について4件法による評定を求めた。

〈A君の事例(男性×目標あり×親から自立)〉23歳の男性、A君は今春大学を卒業したのですが、現在は定職につかず、アルバイトで生活をしています。A君は経済学部部に所属していましたが、あるきっかけから、全く畑違いの仕事に関心を持つようになり、その方面に進みたいと思うようになりました。現在は自宅を出て、一人暮らしをしています。自分のアルバイトで生活費や小遣い、そして進学のための学費をためています。将来は専門の大学を卒業して資格を得て、その仕事につきたいと考えています。

〈B君の事例(男性×目標なし×親に依存)〉23歳の男性、B君は今春大学を卒業したのですが、現在は定職につかず、アルバイトで生活をしています。A君は経済学部部に所属していましたが、将来の目標が定まらず、自分に適していると思える仕事を見つけることができませんでした。現在は自宅に親と一緒に住み、生活費や家事の面で支えてもらいながら、とりあえずアルバイトをして、自分の小遣いを稼いでいます。将来のことは考えておらず、やりたいことが見つかるまでこの生活を続けていきたいと思っています。

調査手続き 4月および7月の心理学(一般教育)の授業時間内において、科目の受講者に対し質問紙を配布し、回答を求めた。

結果の整理²

項目分析 両調査に参加した調査対象者のうち、今回の調査目的に合わないフルタイムの仕事を持つ学生のデータを除外したところ、最終的な調査対象者の人数は228人となり、性別、学年の内訳はTABLE.1のようになった。年齢の範囲は18歳-23歳で、平均は18.7歳(SD=0.95)であった。

また、4月段階のアルバイト経験と7月段階のアルバイト経験に関する回答に基づいて被験者を4種類に分類した。グループIは4月も7月もアルバイトの経験のないと回答した群(74名)、グループIIは4月にはアルバイトをしていたが現在はしていないと回答した群(5名)、グループIIIは4月にはしていなかったが7月にはアルバイトをしていると回答した群(59名)、グループIVは4月も7月もアルバイトを行っているという回答した群(89名)である。このうちグループIIは他の群に比して人数が極端に少ないので、以後の分析からは外した。

フリーター生活への態度項目は、得点が高いほど肯定的な態度を示すように得点化した。A、Bそれぞれのピネットに関する3項目間(共感度・成功期待度・賛成度)の相関を求めたところ相互相関が高かったので、この3項目ずつを合計し、「フリーター生活への態度A」「フリーター生活への態度B」得点とした。就業動機については、4月と7月のデータそれぞれの因子構造を確認した結果、安達(1998)の尺度構成時の研究と同じ4因子構造が確認された。項目の若干の相違はあったものの、抽出された因子の内容もほぼ一

TABLE.1 調査対象者の内訳

| | 男子学生 (n=117) | 女子学生 (n=110) | 合計 |
|-----|--------------|--------------|-----|
| 1年次 | 86 | 88 | 174 |
| 2年次 | 14 | 15 | 29 |
| 3年次 | 17 | 7 | 24 |

² 本研究のデータ解析には、SPSS for Windows version.13.0Jを使用した。

TABLE. 2 各尺度の平均と信頼性係数

| | α 係数 | 最小値 | 最大値 | 男子学生 | 女子学生 | t (220) | |
|-----------------|-------------|-----|-----|-------------|-------------|-----------|-------------|
| 4月-フリーター生活への態度A | .78 | 3 | 15 | 11.75(2.04) | 12.12(2.28) | 1.24 | <i>n.s.</i> |
| 4月-フリーター生活への態度B | .77 | 3 | 15 | 7.06(2.35) | 6.96(2.17) | 0.32 | <i>n.s.</i> |
| 4月-探索志向 | .88 | 13 | 55 | 44.95(7.79) | 45.68(7.66) | 0.69 | <i>n.s.</i> |
| 4月-対人志向 | .83 | 13 | 48 | 34.66(6.92) | 35.44(6.68) | 0.86 | <i>n.s.</i> |
| 4月-上位志向 | .85 | 11 | 45 | 30.30(7.37) | 29.92(7.33) | 0.38 | <i>n.s.</i> |
| 4月-挑戦志向 | .76 | 16 | 40 | 30.11(5.41) | 28.88(5.16) | 1.72 | <i>n.s.</i> |
| 7月-フリーター生活への態度A | .81 | 3 | 15 | 11.95(2.27) | 12.18(1.89) | 0.82 | <i>n.s.</i> |
| 7月-フリーター生活への態度B | .81 | 3 | 15 | 7.15(2.56) | 6.87(1.98) | 0.91 | <i>n.s.</i> |
| 7月-探索志向 | .91 | 11 | 55 | 43.68(8.98) | 44.88(7.23) | 1.09 | <i>n.s.</i> |
| 7月-対人志向 | .85 | 12 | 49 | 34.36(7.64) | 35.63(6.96) | 1.29 | <i>n.s.</i> |
| 7月-上位志向 | .87 | 12 | 45 | 31.03(7.52) | 30.28(6.93) | 0.77 | <i>n.s.</i> |
| 7月-挑戦志向 | .81 | 13 | 40 | 29.65(6.14) | 29.01(5.18) | 0.82 | <i>n.s.</i> |

(注) 括弧内は標準偏差。

致していたため、安達(1998)と同様の方法で下位尺度を構成した。これらの変数の α 係数と平均、男女の平均値の検定の結果は、TABLE. 2のようになった。男女差は確認されなかったため、以後の分析は原則として男女をまとめて行っている。

アルバイト経験とキャリア意識の関連 アルバイト経験とキャリア意識の関連を検討するために、グループI, III, IVの4月, 7月のフリーター生活への態度および就業動機尺度の平均値を算出した(TABLE. 3)。キャリア意識を従属変数、アルバイト経験のグループを独立変数とする分散分析の結果、グループ間に有意差が確認されたのは、4月時点では対人志向尺度のみであった($F(2, 219) = 4.22, p < .05$)。TUKEY法による多重比較の結果、グループIII, IVに比してグループIの対人志向性が低いことが確認された。他方、7月時点では、対人志向尺度と上位志向尺度にグループ間の有意差がみられた(対人志向性尺度は $F(2, 219) = 8.59, p < .01$; 上位志向性尺度は $F(2, 219) = 4.18, p < .05$)。これらについても同様に、グループIの対人志向性、上位志向性が他の2群よりも低い傾向が示された。

次に、キャリア意識の各変数について、7月から4月の値を単純減算して

TABLE. 3 アルバイト経験の違いとキャリア意識

| | グループI (n=72) | グループIII (n=59) | グループIV (n=88) | F(2,219) | |
|-----------------|-----------------|-------------------|------------------|----------|----------|
| 4月-フリーター生活への態度A | 11.79(2.11) | 11.91(1.88) | 12.06(2.39) | 0.32 | |
| 4月-フリーター生活への態度B | 7.51(2.26) | 6.74(2.23) | 6.78(2.24) | 2.66 | |
| 4月-探索志向 | 44.43(7.75) | 46.42(7.12) | 45.29(8.06) | 1.09 | |
| 4月-対人志向 | 33.22(7.28) | 36.35(6.97) | 35.67(5.99) | 4.22* | G1<G3,G4 |
| 4月-上位志向 | 29.05(7.86) | 29.91(7.06) | 31.14(7.01) | 1.68 | |
| 4月-挑戦志向 | 29.16(5.58) | 29.55(5.21) | 29.79(5.21) | 0.28 | |
| 7月-フリーター生活への態度A | 11.87(2.23) | 12.22(1.56) | 12.12(2.28) | 0.49 | |
| 7月-フリーター生活への態度B | 6.89(2.43) | 7.25(2.04) | 6.97(2.37) | 0.43 | |
| 7月-探索志向 | 43.05(8.32) | 44.55(9.14) | 45.07(7.35) | 1.28 | |
| 7月-対人志向 | 32.33(8.37) | 35.32(7.21) | 36.94(5.73) | 8.59** | G1<G3,G4 |
| 7月-上位志向 | 28.91(7.71) | 30.61(7.18) | 32.16(6.59) | 4.18* | G1<G3,G4 |
| 7月-挑戦志向 | 28.51(5.37) | 29.08(6.36) | 30.21(5.42) | 1.89 | |

(注) 括弧内は標準偏差。 * $p < .05$, ** $p < .01$

態度変化量として算出した³。これについても同様にアルバイト経験のグループとの関連を調べたところ (TABLE. 4), フリーター生活への態度Bの変化量と対人志向性尺度の変化量においてグループ間に有意差が確認された (Δ フリーター生活への態度Bは $F(2,219) = 3.46$, $p < .05$; Δ 対人志向性尺度は $F(2,219) = 3.37$, $p < .05$)。TUKEY法による多重比較を行った結果、フリーターへの態度Bについては、グループIIIにおける肯定的方向への変化量が大きいこと、および、対人志向については、グループIが他の2群よりも少ない変化量を示していることが確認された。

アルバイト経験がフリーター生活への態度に与える影響 アルバイト経験がキャリア意識に与える影響を検討するために、4月時点でのフリーターへの態度と就業動機尺度、および、アルバイト経験の有無⁴を説明変数、7月時点でのフリーターへの態度基準変数とした重回帰分析を行った (TABLE. 5)。その結果、基準変数への標準偏回帰係数が有意であったのは、4月段階の同

³ たとえば、TABLE. 4. 内の「 Δ 探索志向」は、7月時点の探索志向性尺度の値から4月時点の同尺度の値を減算したものである。よって、プラスの値は得点の上昇、マイナスの値は得点の下降を意味する。

⁴ アルバイト経験の有無については、アルバイト経験のない者に0、ある者に1とするダミー変数として重回帰分析に投入した。

TABLE. 4 アルバイト経験の違いとキャリア意識の変化量

| | グループI (n=72) | グループIII (n=59) | グループIV (n=88) | F(2,219) | |
|---------------|-----------------|-------------------|------------------|----------|-------------|
| △フリーター生活への態度A | +0.12(1.99) | +0.32(1.81) | +0.01(1.87) | 0.48 | |
| △フリーター生活への態度B | -0.55(2.19) | +0.51(2.55) | +0.19(2.44) | 3.46 * | G1, G4 < G3 |
| △探索志向 | -1.37(5.53) | -1.86(9.61) | -0.21(7.86) | 0.91 | |
| △対人志向 | -0.89(6.01) | -1.03(6.24) | +1.26(6.47) | 3.37 * | G1 < G3, G4 |
| △上位志向 | -0.13(5.47) | +0.69(7.27) | +1.02(5.97) | 0.72 | |
| △挑戦志向 | -0.64(4.34) | -0.47(5.84) | +0.41(4.96) | 1.04 | |

(注) 括弧内は標準偏差。 * $p < .05$, ** $p < .01$

じ変数の値のみであり（フリーター生活への態度Aは $\beta = .59$, $p < .001$ ；フリーター生活への態度Bは $\beta = .44$ $p < .001$ ），他の説明変数はいずれも有意ではなかった。また，上で算出したフリーター生活への態度における4月と7月の差異を基準変数とした分析では，フリーター生活への態度Bの変化量において，アルバイト経験($\beta = .16$ $p < .05$)，および，4月時点の挑戦志向尺度($\beta = -.21$ $p < .05$)からの標準偏帰帰係数が有意であった。それに対し，フリーター生活への態度Aについては，有意な説明変数は存在しなかった。

考察

本研究の目的は，アルバイト経験がキャリア意識に及ぼす影響を検討することである。そのために，4月と7月の2回にわたる調査を行い，アルバイト経験によってキャリア意識がどのように変化するかを検討した。

4月・7月の両時点におけるアルバイト経験の有無によって被験者を分類し，新規にアルバイトを開始した群（グループIII）と開始しなかった群（グループI）を比較した結果，4月の時点では対人志向性尺度に，7月時点では対人志向性尺度と上位志向性尺度の得点に有意差がみられた。グループIIIがアルバイトを開始する以前より両群には対人志向性における差は存在していたことになるが，この結果について，安達（1998）の調査結果（男子学生

TABLE. 5 7月時点でのフリーター生活への態度に関する重回帰分析

| | 7月-フリーター生活への態度A | 7月-フリーター生活への態度B | Δフリーター生活への態度A | Δフリーター生活への態度B |
|-----------------|-----------------|-----------------|---------------|---------------|
| アルバイト経験 | .02 | .09 | .01 | .16 * |
| 4月-フリーター生活への態度A | .59 ** | ψ | ψ | ψ |
| 4月-フリーター生活への態度B | ψ | .44 ** | ψ | ψ |
| 4月-探索志向 | .05 | .01 | .05 | .12 |
| 4月-対人志向 | .02 | .06 | -.06 | -.04 |
| 4月-上位志向 | -.01 | -.03 | .09 | .07 |
| 4月-挑戦志向 | -.03 | -.13 | -.11 | -.21 * |
| 重相関係数 | .61 ** | .47 ** | .12 | .24 * |

(注) * $p < .05$, ** $p < .01$

$M=34.6$, $SD=6.94$; 女子学生 $M=35.6$, $SD=4.72$) と比較すると、この差はグループⅢの対人志向性が高いというよりも、グループⅠのそれが低くなっていることを意味していることがわかる。よって、この群差は対人志向性の低さがアルバイト従事を抑制している傾向を意味するものと考えられる。

本研究の主題であった、アルバイト経験とフリーター生活への態度との関連については、4月・7月のいずれにおいても両群の差異はみられなかった。フリーター生活への態度A・Bを基準変数とした重回帰分析においても、アルバイト経験の影響は有意ではなく、有意であったのは4月時点での同じ対象に対する態度の影響のみであった。よって、アルバイト経験がフリーター生活への態度を規定するという予測は本研究では支持されなかったといえる。他方、4月から7月への態度変化量という指標に焦点を当てた場合には、フリーター生活への態度BにおいてグループⅠとグループⅢの差異が確認された。ピネットにおけるBの生活、すなわち、目標を持ち自立した生活を送っているフリーターに対する態度は、アルバイトを新規に開始した学生においてより肯定的に変化していた。フリーターへの態度を基準変数とした重回帰分析においても同様の傾向が確認され、アルバイト経験がフリーター生活への影響Bに有意な影響を与えていた。このように、本研究においては、アルバイトという経験自体は、フリーター生活への態度（特に夢を抱き、自立的

なフリーター)への態度変化に影響するものの、その水準は高いものではなく、4月時点の態度ほど予測力はないことが示された。

本調査におけるこうした結果の背景には、アルバイトの経験を自己のなかでどう位置づけているかという問題が関わっていることが推測される。E. H. Erikson によって提唱されたライフサイクル理論は、青年期の発達課題を「自我同一性の確立—拡散」とした。そして、現代のような複雑・多様で、かつ競争的な社会において自身の適性や将来展望を形成し確認する作業は容易なものではないため、現代の青年はアルバイトを通してさまざまな役割実験を行い、自我同一性の探索・確立につなげていると推測している (e.g., 遠藤, 1981)。こうした同一性確立の過程において、とくに重要な意味を持つのは役割実験のなかから「自分らしさ」を主体的に取捨選択していくという姿勢である。アルバイトへの関わりについていえば、それはアルバイトに対して「自分らしさ」を求めるという位置づけにあたる。他方、アルバイトを報酬の手段としてのみ位置づけている場合も多くあるであろう。そうした位置づけの差異が仕事への動機づけ、職場環境や人間関係の認知等、仕事のなかのさまざまな段階において作用し、結果的にアルバイト経験のキャリア意識への影響を媒介する役割を担っているのではないだろうか。

近年、キャリア意識の形成のために、高校生や大学生を対象としたインターンシップがカリキュラムに取り入れられるようになった。その一方で教育の現場や受け入れ企業においては、インターンシップとアルバイトの混同がしばしば指摘されている。たとえば、厚生労働省の「インターンシップ推進のための調査研究委員会」の議事録にも、インターンシップとアルバイトとの棲み分けが難しいとする意見や、その違いを賃金の有無のみとする意見があげられている。しかし、本調査の結果を踏まえれば、アルバイトとキャリア意識形成のために主体的に取り組むインターンシップとの間には、キャリア意識への影響という点で本質的な違いがある。

以上のように、本研究の結果は、キャリア意識に与えるアルバイト経験の影響は統計的に有意なものではなく、かなり限定的なものであることを示し

ている。そして、このことはアルバイトそのものよりも、それをどう選択し、位置づけているかという心理的側面の重要性を示唆するものとして解釈された。よって、今後の研究においては、アルバイトの職種やその選択理由といった要因の検討を含め、個人内でのアルバイトの位置づけに焦点をあてて進められることが必要であろうと思われる。

ただし、こうした結果の解釈に際しては、本調査の方法上の問題点を考慮しなくてはならない。まず、本研究の2調査の3ヶ月という間隔について、それが適切かどうかは、大学生のアルバイト経験に関する十分な研究資料がない現状では判断が難しいが、より長期の間隔をおいた調査も必要であろうと思われる。もう一点は、本調査の対象の大部分が新入学生であったことである。大学生の自我同一性地位を横断的に調査した加藤（1997）によれば、将来の探索・試行の差通にある積極的モラトリアム地位の割合は大学2年目において最も高く、それを経て大学3,4年目にはアイデンティティ確立地位の割合が増加する。この見解を踏まえると、本調査の対象者には同一性の危機に直面していない者が多く、それが結果に影響した可能性がある。アルバイト経験とキャリア意識に関するモデルを一般化していくためには、これらの点についてさらに詳細に検討する必要があるだろう。

引用文献

- 安達智子 1998 大学生の就業動機測定の試み 実験社会心理学研究, 38, 172-182.
- 遠藤達雄 1981 人生周期と同一性 遠藤辰雄編「アイデンティティの心理学」ナカニシヤ出版, pp.12-27.
- エリクソン, E. H. (村瀬孝雄・近藤邦夫訳) 1989 ライフサイクル, その完結 みすず書房 (Erikson, E. H. 1982 *The life cycle completed*. New York: Norton.)
- 独立行政法人日本学生支援機構「平成16年度学生生活調査結果」報告書 (http://www.jasso.go.jp/statistics/gakusei_chosa/data04.html#no5) 2006年12月1日検索.

- 福武書店教育研究所 1992 高校生たちのアルバイト体験 モノグラフ・高校生 vol. 34 (浦上, 2003 による).
- 加藤厚 1997 アイデンティティの探求 加藤隆勝・高木秀明編「青年心理学概論」誠信書房, pp. 14-32.
- 小杉礼子 2002 若者のワークスタイルと就労意識 労働時報, 55(1), 5-12.
- 厚生労働省「第6回インターンシップ推進のための調査研究委員会」議事要旨 (<http://www.mhlw.go.jp/shingi/2005/02/s0216-6.html>) 2006年12月1日検索.
- 杉山成・神田信彦 2003 フリーターに対する大学生の意識と態度 生活科学研究, 25, 29-40.
- 浦上昌則 2003 高校生の進路選択 現代のエスプリ, 427, 163-176.
- 若松養亮 2006 アルバイトとインターンシップ 白井利明編「よくわかる青年心理学」ミネルヴァ書房, pp.118-119.
- 吉田隆夫・飯田博・三宅章介 1997 大学生と高校生アルバイトの職業意識に関する調査研究(2) 日本進路指導学会第19回研究大会発表資料集(浦上, 2003 による).